

ここ数年個別フォローや班活動を通してみんなの力を借りて自己理解が進み、頑張ることが正義だという父からの呪いも、大分軽減できたと思っている。

ただ、先日読んだ本で紹介されていたエピソードを読んで、頭で考えるよりも先に体が反応して泣いてしまった時、私はまだ自分のことを受け入れられていないのだと痛感した。受け入れているのは、“頑張っている”という限定付きの自分。本の中で、障害を持つ息子に対して母親が言った「私はあなたがこの状態で産まれて来てよかったと思っている。それがあなただから」という言葉は、まさに私自身が言われた言葉だった。

「ありのままの自分を受け入れてほしい」とはどんなことなのかと具体的に話しながら、特に普段不安を強く感じたり、自信がなくなる瞬間がある訳じゃないので、それを本当に必要とするシチュエーションが今までの人生で訪れていないことに気付く。ただ、心の奥底に眠っていて、今回のように突如起こされるような感覚なのだ。

父が亡くなった時のことを振り返りながら、陽子さんから、「お父さんも自分の病気(死)を受け入れられていなかったんだろうね」と言われ、初めて知る。「必ず治すから」という父の言葉を信じていたけど、それは父自身、自分を鼓舞するための言葉だったんだろう。私も父が死ぬとは思いたくなかったもので、都合良くその言葉を信じて、考えないようにしていた。

でも、自分が父の立場で、末期がんだとわかったら何をするだろうと考えたら、生きることは早々に諦めて、旅行に行ったり、家族との思い出を作ったり、子供たちに何を残せるか考えたと思う。父にはそれがなかった。(あったのかもしれない

けど、それが全く見えなかった。ということは、なかったと同じだろう)どこまでも「自分」の人生を全うした人だったのだなと思う。

私の大学受験と父の闘病生活の時期が被ったのだが、父は私の頑張りを、自分が病気と闘うためのモチベーションにしていたのだと、陽子さんと話しながら気付く。父は私を同志のように思っていた感覚がある。こっちにしたらたまったもんじゃないけど(言葉に出されてたら、相当なプレッシャーになっていだろう)、一生分の親孝行はできたのかもしれない。

そして、大学受験の時に、我が家の経済状況を考えると、「浪人はさせられない」、「日東駒専以下の大学には行かせられない」と一方的に条件を付けられた。思えば、この時父は末期がんだとわかっていたのだろう。(受験が終わってから知らされる)受験を控えた私を心配させないための配慮だったのだと思うが、それでも、そういう事情があるとわかっていたら、受け止め方もまた違ったのではないかと思う。

病気と最後まで闘った父のことを、強い人だとずっと尊敬していたけど、本当の強さとは、そうじゃないんじゃないかと初めて疑問が湧いた。夏には転移が発覚し、父も途中で死を受け入れた瞬間があったと思う。(生命保険を生前給付で受け取っていたことから、途中で覚悟していたことがわかる)「心配させたくない」、「ショックを与えちゃいけない」、「目の前で泣かれない」、「どれも親としては当然の思いかもしれないけど、死を受け入れられない葛藤も含めて、全部見せてほしかったと思う。それは受験のことにも言える。結局親の都合で状況は受け入れざるを得ないのに、過程が全て飛ばされているのだ。

私も家族の一員として一緒に悩み、苦しみたかった。当時は辛かったと思うけど、それでも、そうすれば父の死をもっと早い段階で受け入れられたんじゃないかと思う。今回の個別フォローは、父との記憶を掘り起こしながら、「悲しみのプロセス」をきちんと経ていないから、父の死をまだ受け入れられていないこと、そして、それが自分自身を受け入れられていないことに繋がっているのだと理解できた。

でも、こうやって一つ一つ思い返すと、父の行動に対して疑問に思うこと、不満に思うことが色々出て来る。陽子さん曰く、悲しみのプロセスはやり直しができるのだという。当時目を背けて向き合わなかったことの代償の大きさを改めて感じるが、そのツケを払うのが今なのだと思う。

(E.M 40代女性 埼玉県)